

# 幻談

幸田露伴

青空文庫



こう暑くなつては皆さん方があるいは高い山に行かれたり、あるいは涼しい海辺に行かれたりしまして、そうしてこの悩ましい日を充実した生活の一部分として送ろうとなさるのも御尤もです。が、もう古い朽ちてしまえば山へも行かれず、海へも出られないですが、その代り小庭の朝露、縁側の夕風ぐらゐに満足して、無難に平和な日を過して行けるといふもので、まあ年寄はそこいらで落着いて行かなければならないのが自然なのです。山へ登るのも極くいいことであります。深山に入り、高山、嶮山なんぞへ登るといふことになる、一種の神秘的な興味も多いことです。その代りまた危険も生じます訳で、怖い話が伝えられております。海もまた同じことです。今お話し致そうというのは海の話ですが、先に山の話一度申して置きます。

それは西暦千八百六十五年の七月の十三日の午前五時半にツエルマツトという処から出発して、名高いアルプスのマッターホルンを世界始まって以来最初に征服致しましょうと心ざし、その翌十四日の夜明前から骨を折つて、そうして午後一時四十分に頂上へ着きましたのが、あの名高いアルプス登攀記の著者のウインパー一行でありました。その一行八人がアルプスのマッターホルンを初めて征服したので、それから段々とアルプスも開けた

ような訳です。

それは皆様がマッターホルンの征服の紀行によって御承知の通りでありますから、今私  
が申さなくても夙に御合点のことですが、さてその時に、その前から他の一行即ち伊太利  
のカレルという人の一群がやはりそこを征服しようとして、両者は自然と競争の形になっ  
ていたのであります。しかしカレルの方は不幸にして道の取り方が違っていたために、ウ  
インパーの一行には負けてしまったのであります。ウインパーの一行は登る時には、クロ  
ス、それから次に年を取った方のペーテル、それからその悴が二人、それからフランシス  
・ダグラス卿というこれは身分のある人です。それからハドウ、それからハドス、それか  
らウインパーというのが一番終いで、つまり八人がその順序で登りました。

十四日の一時四十分にととうさしもの恐しいマッターホルンの頂上、天にもとどくよ  
うな頂上へ登り得て大に喜んで、それから下山にかかりました。下山にかかる時には、一  
番先へクロス、その次がハドウ、その次がハドス、それからフランシス・ダグラス卿、そ  
れから年を取ったところのペーテル、一番終いがウインパー、それで段々降りて来たので  
ありますが、それだけの前古未曾有の大成功を収め得た八人は、上りにくらべてはなお一  
倍おそろしい氷雪の危険の路を用心深く辿りましたのです。ところが、第二番目のハドウ、

それは少し山の経験が足りなかつたせいもありましようし、また疲労したせいもありましようし、イヤ、むしろ運命のせいと申したいことで、誤つて滑つて、一番先にいたクロスへぶつかりました。そうすると、雪や氷の蔽つている足がかりもないような険峻の処で、そういうことが起つたので、忽ちクロスは身をさらわれ、二人は一つになつて落ちて行きました訳。あらかじめロープをもつて銘々の身をつないで、一人が落ちても他が踏止まり、そして個々の危険を救うようにしてあつたのでありますけれども、何せ絶壁の処で落ちかかつたのですから堪りません、二人に負けて第三番目も落ちて行く。それからフランシス・ダグラス卿は四番目にいたのですが、三人の下へ落ちて行く勢で、この人も下へ連れて行かれました。ダグラス卿とあとの四人との間でロープはピンと張られました。四人はウンと踏堪えました。落ちる四人と堪える四人との間で、ロープは力足らずしてプツリと切れて終いました。丁度午後三時のことでありますが、前の四人は四千尺ばかりの氷雪の処を逆おとしに落下したのです。後の人は其処へ残つたけれども、見る見る自分たちの一行の半分は逆落しになつて深い深い谷底へ落ちて行くのを目にしたその心持はどんなでしよう。それで上に残つた者は狂人の如く興奮し、死人の如く絶望し、手足も動かせぬやうになつたけれども、さてあるべきではありませんせぬから、自分たちも今度は滑つて死ぬば

かりか、不測の運命に臨んでいる身と思ひながら段々下りてまいりまして、そうして漸く午後の六時頃に幾何か危険の少いところまで下りて来しました。

下りては来ましたが、つい先刻まで一緒にいた人々がもう訳も分らぬ山の魔の手にさらわれて終つたと思うと、不思議な心理状態になつていたに相違ありません。で、我々はそういう場合へ行つたことがなくて、ただ話のみを聞いただけでは、それらの人の心の中がどんなものであつたらうかといふことは、先ず殆ど想像出来ぬのでありますが、そのウインパーの記したものによりますと、その時夕方六時頃です、ペーテル一族の者は山登りに馴れている人ですが、その一人がふと見るといふと、リスカンという方に、ぼうつとしたアーチのようなものが見えましたので、はてナと目を留めておきますと、外の者もその見ている方を見ました。するとやがてそのアーチの処へ西洋諸国の人にとっては東洋の我々が思うのとは違つた感情を持つところの十字架の形が、それも小さいのではない、大きな十字架の形が二つ、ありあり空中に見えました。それで皆もなにかこの世の感じでない感じを以てそれを見ました、と記してあります。それが一人見たものではありませぬ、残つていた人にみな見えたと申すのです。十字架は我々の五輪の塔同様なものです。それは時に山の氣象で以て何かの形が見えることもあるものでありますが、とにかく今のさき

まで生きておつた一行の者が亡くなって、そうしてその後へ持つて来て四人が皆そういう十字架を見た、それも一人二人に見えたのでなく、四人に見えたのでした。山にはよく自分の身体の影が光線の投げられる状態によつて、向う側へ現われることがあります。四人の中にはそういう幻影かと思つた者もあつたでしょう、そこで自分たちが手を動かしたり身体を動かして見たところが、それには何らの関係がなかつたと申します。

これでこの話はお終いに致します。古い経文の言葉に、心は巧みなる画師の如し、とございます。何となく思浮めらるる言葉ではござりませぬか。

さてお話し致しますのは、自分が魚釣を楽んでおりました頃、或先輩から承りました御話です。徳川期もまだひどく末にならない時分の事でございます。江戸は本所の方に住んでおられました人で——本所という処は余り位置の高くない武士どもが多くいた処で、よく本所の小ツ旗本などと江戸の諺で申した位で、千石とまではならないような何百石というような小さな身分の人たちが住んでおりました。これもやはりそういう身分の人で、物事がよく出来るので以て、一時は役づいておりました。役づいておられますれば、つまり出世の道も開けて、宜しい訳でしたが、どうも世の中というものはむずかしいもので、その

人が良いから出世するという風には決っていないもので、かえって外の者の嫉みや憎みをも受けまして、そうして役を取上げられます、そうすると大概小普請というのに入る。出る杓が打たれて済んで御小普請、などと申しまして、小普請入りというのは、つまり非役になったというほどの意味になります。この人も良い人であつたけれども小普請入になつて、小普請になつてみれば閑なものですから、御用は殆どないので、釣を楽みにしておりました。別に活計に困る訳じやなし、奢りも致さず、偏屈でもなく、ものはよく分る、男も好し、誰が目にも良い人。そういう人でしたから、他の人に面倒な関係なんかを及ぼさない釣を楽んでいたのは極く結構な御話でした。

そこでこの人、暇具合さえ良ければ釣に出ておりました。神田川の方に船宿があつて、日取り即ち約束の日には船頭が本所側の方に舟を持って来ているから、其処からその舟に乗つて、そうして釣に出て行く。帰る時も舟から直に本所側に上つて、自分の屋敷へ行く、まことに都合好くなつておりました。そして潮の好い時には毎日のようにケイズを釣つておりました。ケイズと申しますと、私が江戸訛りを言うものとお思ひになる方もあります。ケイズは訛りですが、ケイズは訛りで、ケイズが本当です。系図を言えば鯛の中、というので、系図鯛を略してケイズという黒い鯛で、あの恵比寿様

が抱いていらつしやるものです。イヤ、斯様に申しますと、えびす様の抱いていらつしやるのは赤い鯛ではないか、変なことばかり言う人だと、また叱られますか知れませんが、これは野必大と申す博物の先生が申されたことです。第一えびす様が持つていられるようなああいふ竿では赤い鯛は釣りませぬものです。黒鯛ならああいふ竿で丁度釣れますので。釣竿の談になりますので、よけいなことですがちよつと申し添えます。

或日のこと、この人が例の如く舟に乗つて出ました。船頭の吉というのはもう五十過ぎで、船頭の年寄なぞというものは客が喜ばないもんでありますが、この人は何もそう焦つて魚をむやみに獲ろうというのではなし、吉というのは年は取つてゐるけれども、まだそれでもそんなにぼけているほど年を取つてゐるのじやなし、ものはいろいろよく知つてゐるし、この人は吉を好い船頭として始終使つていたのです。釣船頭というものは魚釣の指南番か案内人のように思う方もあるかも知れませぬけれども、元来そういうものじやないので、ただ魚釣をして遊ぶ人の相手になるまでで、つまり客を扱うものなんですから、長く船頭をしていた者なんぞというものはよく人を呑込み、そうして人が愉快と思うこと、不愉快と思うことを呑込んで、愉快と思うように時間を送らせることが出来れば、それが好い船頭です。網船頭なぞというものはなおのことそうです。網は御客自身打つ人もある

けれども先ずは網打が打って魚を獲るのです。といって魚を獲って活計を立てる漁師とは異う。客に魚を与えることを多くするより、客に網漁に出たという興味を与えるのが主です。ですから網打だの釣船頭だのというものは、洒落が分らないような者じゃそれになっていない。遊客も芸者の顔を見れば三弦を弾き歌を唄わせ、お酌には扇子を取って立って舞わせる、むやみに多く歌舞を提供させるのが好いと思つてゐるような人は、まだまるで遊びを知らないのと同じく、魚にばかりこだわつてゐるのは、いわゆる二才客です。といつて釣に出て釣らなくても可いという理屈はありませんが、アコギに船頭を使つて無理にでも魚を獲ろうというようなところは通り越してゐる人ですから、老船頭の吉でも、かえつてそれを好いとしてゐるのです。

ケイズ釣というのは釣の中でもまた他の釣と様子が違う。なぜかと言いますと、他の、例えばキス釣なんぞというのは立込みといつて水の中へ入つていたり、あるいは脚榻釣といつて高い脚榻を海の中へ立て、その上に乗つて釣るので、魚のお通りを待つてゐるので、すから、これを悪く言う者は乞食釣なんぞと言う位で、魚が通つてくれなければ仕様がな、い、みじめな態だからです。それからまたボラ釣なんぞというものは、ボラという魚が余り上等の魚でない、群れ魚ですから獲れる時は重たくて仕方がない、担わなくては持てな

いほど獲れたりなんぞする上に、これを釣る時には舟の艫の方へ出まして、そうして大きな長い板子や楫なんぞを舟の小縁から小縁へ渡して、それに腰を掛けて、風の吹きさらしにヤターの客よりわるいかっこうをして釣るのでありますから、もう遊びではありませぬ。本職の漁師みたいな姿になってしまつて、まことに哀れなものであります。が、それはまたそれで丁度そういう調子合のことの好きな磊落な人が、ボラ釣は豪爽で好いなどと賞美する釣であります。が、話中の人はそんな釣はしませぬ。ケイズ釣りというのはそういうのと違ひまして、その時分、江戸の前の魚はずっと大川へ奥深く入りましたものであります。永代橋新大橋より上流の方でも釣つたものです。それですから善女が功德のために地藏尊の御影を刷つた小紙片を両国橋の上からハラハラと流す、それがケイズの眼球へかぶさるなどという今からは想像も出来ないような穿ちさえありました位です。

で、川のケイズ釣は川の深い処で釣る場合は手釣を引いたもので、竿などを振廻して使わずとも済むような訳でした。長い釣綸を※輪から出して、そうして二本指で中りを考えて釣る。疲れた時には舟の小縁へ持つて行つて錐を立てて、その錐の上に鯨の鬚を据えて、その鬚に持たせた岐に綸をくいこませて休む。これを「いとかけ」と申しました。後には進歩して、その鯨の鬚の上へ鈴なんぞを附けるようになり、脈鈴と申すようになりました。

脈鈴は今も用いられています。しかし今では川の様子が全く異いまして、大川の釣は全部なくなり、ケイズの脈釣なんぞというものは何方も御承知ないようになりました。ただしその時分でも脈釣じゃそう釣れない。そうして毎日出て本所から直ぐ鼻の先の大川の永代の上あたりで以て釣つていては興も尽きるわけですから、話中の人は、川の脈釣でなく海の竿釣をたのしみました。竿釣にも色々ありまして、明治の末頃はハタキなんぞという釣もありました。これは舟の上に立つていて、御台場に打付ける浪の荒れ狂うような処へ鉤を抛つて入れて釣るのです。強い南風に吹かれながら、乱石にあたる浪の白泡立つ中へ竿を振つて餌を打込むのですから、釣れることは釣れても随分労働的の釣であります。そんな釣はその時分にはなかつた、御台場もなかつたのである。それからまた今は導流柵なんぞで流して釣る流し釣もありますが、これもなかなか草臥れる釣であります。釣はどうも魚を獲ろうとする三昧になりますと、上品でもなく、遊びも苦しくなるようでございます。

そんな釣は古い時分にはなくて、濔の中だとか濔がらみで釣るのを濔釣と申しました。これは海の中に自から水の流れる筋がありますから、その筋をたよつて舟を潮なりにちやんと止めまして、お客は将監——つまり舟の頭の方からの第一の室——に向うを向いてしやんと坐つて、そうして釣竿を右と左と八の字のように振込んで、舟首近く、甲板のさき

の方に互っている簪の右の方へ右の竿、左の方へ左の竿をもたせ、その竿尻をちよつと何とかした銘々の随意の趣向でちよいと軽く止めて置くのであります。そうして客は端然として竿先を見ているのです。船頭は客よりも後ろの次の間にいまして、丁度お供のような形に、先ずは少し右舷によつて扣えております。日がさす、雨がふる、いずれにも無論のこと苦というものを葺きます。それはおもての舟梁とその次の舟梁とにあいている孔に、「たてじ」を立て、二のたてじに棟を渡し、肘木を左右にはね出させて、肘木と肘木とを木竿で連ねて苦を受けさせます。苦一枚というのは凡そ畳一枚より少し大きいもの、贅沢にしますと尺長の苦は畳一枚のよりよほど長いのです。それを四枚、舟の表の間の屋根のように葺くのでありますから、まことに具合好く、長四畳の室の天井のように引いてしまえば、苦は十分に日も雨も防ぎますから、ちゃんと座敷のようになるので、それでその苦の下即ち表の間——釣舟は多く網舟と違つて表の間が深いのでありますから、まことに調子が宜しい。そこへ莫塵なんぞ敷きまして、その上に敷物を置き、胡坐なんぞ搔かないで正しく坐っているのが式です。故人成田屋が今の幸四郎、当時の染五郎を連れて釣に出た時、芸道舞台上では指図を仰いでも、勝手にしなせいと突放して教えてくれなかつたくせに、舟では染五郎の座りようを咎めて、そんな馬鹿な坐りようがあるかと激しく叱つたと

いうことを、幸四郎さんから直接に聞きましたが、メナダ釣、ケイズ釣、すずき釣、下品でない釣はすべてそんなものです。

それで魚が来ましても、また、鯛の類というものは、まことにそういう釣をする人々に具合の好く出来ているもので、鯛の二段引きと申しまして、偶には一度にガブツと食べて釣竿を持って行くというようなこともありすけれども、それはむしろ稀有の例で、ケイズは大抵は一度釣竿の先へあたりを見せて、それからちよつとして本当に食うものでありますから、竿先の動いた時に、来たナと心づきましたら、ゆつくりと手を竿尻にかけて、次のあたりを待っている。次に魚がぎゅつと締める時に、右の竿なら右の手であわせて竿を起し、自分の直と後ろの方へそのまま持つて行くので、そうすると後ろに船頭がいますから、これが※網をしゃんと持つていまして掬い取ります。大きくない魚を釣つても、そこが遊びですから竿をぐつと上げて廻して、後ろの船頭の方に遣る。船頭は魚を掬つて、鉤を外して、舟の丁度真中の処に活間がありますから魚を其処へ入れる。それから船頭がまた餌をつける。「旦那、つきました」と言うと、竿をまた元へ戻して狙つたところへ振込むという訳であります。ですから、客は上布の着物を着ても釣ることが出来ず、訳で、まことに綺麗事に殿様らしく遣つていられる釣です。そこで茶の好きな人は玉露など

入れて、茶盆を傍に置いて茶を飲んでいても、相手が二段引きの鯛ですから、慣れてくればしずかに茶碗を下に置いて、そうして釣つていられる。酒の好きな人は潮間などは酒を飲みながらも釣る。多く夏の釣でありますから、泡盛だとか、柳蔭などというものが喜ばれたもので、置水屋ほど大きいものではありませんが上下箱というのに茶器酒器、食器も具えられ、ちよつとした下物、そんなものも仕込まれてあるような訳です。万事がそういう調子なので、真に遊びになります。しかも舟は上だな檜で洗い立ててありますれば、清潔この上なしです。しかも涼しい風のすいすい流れる海上に、片苜を切つた舟なぞ、遠くから見ると余所目から見ても如何にも涼しいものです。青い空の中へ浮上つたように広々と潮が張つているその上に、風のつき抜ける日蔭のある一葉の舟が、天から落ちた大鳥の一枚の羽のようにふわりとしているのですから。

それからまた、漣釣でない釣もあるのです。それは漣で以てうまく食わなかったりなんかした時に、魚というものは必ず何かの蔭にいるものですから、それを釣るのです。鳥は木により、さかなはかかり、人は情の蔭による、なんぞという「よしこの」がありますが、かかりというのは水の中にもさもさしたものがあつて、其処に網を打つことも困難であり、釣鉤を入れることも困難なようなひつかかりがあるから、かかりと申します。そのかかり

にはとかくに魚が寄るものであります。そのかかりの前へ出掛けて行って、そうしてかかりと擦れ擦れに鉤を打込む、それがかかり前の釣といえます。濡だの平場だので釣れない時にかかり前に行くということは誰もすること。またわざわざかかりへ行ききたがる人もある位。古い濡杣、ボツカ、われ舟、ヒビがらみ、シカケを失うのを覚悟の前にして、大様にそれぞれの趣向で遊びます。いずれにしても大名釣といわれるだけに、ケイズ釣は如何にも贅沢に行われたものです。

ところで釣の味はそれでいいのですが、やはり釣は根が魚を獲るといふことにあるものですから、余り釣れないと遊びの世界も狭くなります。或日のこと、ちつとも釣れません。釣れないという未熟な客はとかくにぶつぶつ船頭に向つて愚痴をこぼすものですが、この人はそういうことを言うほどあさはかではない人でしたから、釣れなくてもいつもの通りの機嫌でその日は帰った。その翌日も日取りだったから、翌日もその人はまた吉公を連れて出た。ところが魚というのは、それは魚だからいさえすれば餌があれば食いそうなものだけれども、そうも行かないもので、時によると何かを嫌つて、例えば水を嫌うとか風を嫌うとか、あるいは何か不明な原因があつてそれを嫌うという、いても食わないことがあるもんです。仕方がない。二日ともさっぱり釣れない。そこで幾ら何でもちつとも釣

れないので、吉公は弱りました。小潮の時なら知らんこと、いい潮に出ているのに、二日ともちつとも釣れないというのは、客はそれほど思わなかったところで、船頭に取っては面白くない。それも御客が、釣も出来ていけば人間も出来ている人で、ブツリとも言わないでいてくれるのでかえって気がすくみます。どうも仕様がな。が、どうしても今日は土産を持たせて帰そうと思うものですから、さあいろいろな潮行きと場処とを考えて、あれもやり、これもやったけれども、どうしても釣れない。それがまた釣れるべきはずの月のない大潮の日。どうしても釣れないから、吉もとうとうへたばって終って、

「やあ旦那、どうも二日とも投げられちゃって申訳がございませんア」と言う。客は笑って、

「なアにお前、申訳がございませんなんて、そんな野暮かたぎのことを言うはずの商売じゃねえじゃねえか。ハハハ。いいやな。もう帰るより仕方がねえ、そろそろ行こうじゃないか。」

「ハイ、もう一ヶ処やって見て、そうして帰りましょう。」

「もう一ヶ処たつて、もうそろそろ真づみになって来るじゃねえか。」

真づみというのは、朝のを朝まづみ、晩のを夕まづみと申します。段々と昼になったり

夜になつたりする迫りつめた時をいうのであつて、とかくに魚は今までちつとも出て来なかつたのが、まづみになつて急に出て来たりなんかするものです。吉の腹の中では、まづみに中てたいのですが、客はわざとその反対をいつたのでした。

「ケイズ釣に来て、こんなに晩くなつて、お前、もう一ヶ処なんて、そんなぶいきなことを言い出して。もうよそうよ。」

「済みませんが旦那、もう一ヶ処ちよいと当てて。」

と、客と船頭が言うことがあべこべになりまして、吉は自分の思う方へ船をやりました。

吉は全敗に終らせたくない意地から、舟を今日までかかったことのない場処へ持つて行って、「かし」を決めるのに慎重な態度を取りながら、やがて、

「旦那、竿は一本にして、みよしの真正面へ巧く振込んで下さい」と申しました。これはその壺以外は、左右も前面も、恐ろしい力カリであることを語っているのです。客は合点して、「あいよ」とその言葉通りに実に巧く振込みましたが、心中では気乗薄であつたことも争えませんでした。すると今手にしていた竿を置くか置かぬかに、魚の中りか芥の中りかわからぬ中り、——大魚に大ゴミのような中りがあり、大ゴミに大魚のような中りがあるもので、そういう中りが見えますと同時に、二段引どころではない、糸はピンと張

り、竿はズイと引かれて行きそうになりましたから、客は竿尻を取ってちよいと当てて、直に竿を立てにかかりました。が、こっちの働きは少しも向うへは通じませんで、向うの力ばかりが没義道に強うございました。竿は二本継の、普通の上物でしたが、継手の元際がミチリと小さな音がして、そして糸は敢えなく断れてしまいました。魚が来てカカリへ啣え込んだのか、大芥が持つて行つたのか、もとより見ぬ物の正体は分りませんが、吉はまた一つ此処で黒星がついて、しかも竿が駄目になつたのを見逃しはしませんで、一層心中は暗くなりました。こういうこともない例ではありませんが、飽までも練れた客で、「後追い小言」などは何も言わずに吉の方を向いて、

「帰れつていうことだよ」と笑いましたのは、一切の事を「もう帰れ」という自然の命令の意味だと軽く流して終つたのです。「ヘイ」というよりほかはない、吉は素直にカシを抜いて、漕ぎ出しながら、

「あつしの樗蒲一がコケだつたんです」と自語的に言つて、チョイと片手で自分の頭を打つ真似をして笑つた。「ハハハ」「ハハハ」と軽い笑で、双方とも役者が悪くないから味な幕切を見せたのでした。

海には遊船はもとより、何の舟も見渡す限り見えないようになっていました。吉はぐい

ぐいと漕いで行く。余り晩くまでやって来たから、まずい潮になって来た。それを江戸の方に向つて漕いで行く。そうして段々やって来ると、陸はもう暗くなって江戸の方遙にチラチラと燈が見えるようになりました。吉は老いても巧いもんで、頻りと身体に調子をのせて漕ぎます。吉は既に取除けてあるし、舟はずんずんと出る。客はすることもないから、しゃんとして、ただぼかんと海面を見てみると、もう海の小波のちらつきも段々と見えなくなつて、雨ずつた空が初は少し赤味があつたが、ぼうつと薄墨になつてまいりました。そういう時は空と水が一緒にはならないけれども、空の明るさが海へ溶込むようになって、反射する気味が一つもないようになって来るから、水際が蒼茫と薄暗くて、ただ水際だといふことが分る位の話、それでも水の上は明るいものです。客はなんにも所在がないから江戸のあの燈は何処の燈だろうなどと、江戸が近くなるにつけて江戸の方を見、それからずいと東の方を見ますと、——今漕いでいるのは少しでも潮が上から押すのですから、漕を外れた、つまり水の抵抗の少い処を漕いでいるのでしたが、漕の方をヒョイツと見るといふと、暗いというほどじゃないが、よほど濃い鼠色に暮れて来た、その水の中からふつと何か出ました。はてナと思つて、そのまま見ているとまた何かがヒョイツと出て、今度は少し時間があつてまた引込んでしまいました。葎か蘆のような類のものに見えたが、そ

んなものなら平らに水を浮いて流れるはずだし、どうしても細い棒のようなものが、妙な調子でもって、ツイと出てはまた引込みます。何の必要があるではないが、合点が行きませぬから、

「吉や、どうもあすこの処に変なものが見えるな」とちよつと声をかけました。客がジツと見ているその眼の行方を見ますと、丁度その時またヒヨイツと細いものが出ました。そしてまた引込みました。客はもう幾度も見ましたので、

「どうも釣竿が海の中から出たように思えるが、何だろう。」

「そうでござんすね、どうも釣竿のように見えましたね。」

「しかし釣竿が海の中から出る訳はねえじゃねえか。」

「だが旦那、ただの竹竿が潮の中をころがって行くのとは違った調子があるので、釣竿のように思えるのですネ。」

吉は客の心に幾らでも何かの興味を与えたいと思つていた時ですから、舟を動かしてその変なものが出た方に向ける。

「ナニ、そんなものを、お前、見たからって仕様がねえじゃねえか。」

「だって、あつしにも分らねえおかしなもんだからちよつと後学のために。」

「ハハハ、後学のためには宜かったナ、ハハハ。」

吉は客にかまわず、舟をそつちへ持つて行くと、丁度途端にその細長いものが勢よく大きく出て、吉の真向を打たんばかりに現われた。吉はチャツと片手に受留めたが、シブキがサツと顔へかかった。見るとたしかにそれは釣竿で、下に何かいてグイと持つて行こうとするようなので、なやすようにして手をはなさずに、それをすかして見ながら、

「旦那これは釣竿です、野布袋です、良いものようです。」

「フム、そうかい」といいながら、その竿の根の方を見て、

「ヤ、お客さんじゃねえか。」

お客さんというのは溺死者のことを申しますので、それは漁やなんかに出る者は時々はそういう訪問者に出会いますから申出した言葉です。今の場合、それと見定めましたから、何も嬉しくもないことゆえ、「お客さんじゃねえか」と、「放してしまえ」と言わぬばかりに申しましたのです。ところが吉は、

「エエ、ですが、良い竿ですぜ」と、足らぬ明るさの中でためつすかしつ見ていて、

「野布袋の丸でさア」と付足した。丸というのはつなぎ竿になっていない物のこと。野布袋竹というのは申すまでもなく釣竿用の良いもので、大概の釣竿は野布袋の具合のいい

のを他の竹の竿につないで穂竹として使います。丸というと、一竿全部がそれなのです。丸が良い訳はないのですが、丸でいて調子の良い、使えるようなものは、稀物で、つまり良いものという訳になるのです。

「そんなこと言ったって欲しかあねえ」と取合いませんでした。

が、吉には先刻客の竿をラリにさせたことも含んでいるからでしょうか、竿を取ろうと思ひまして、折らぬように加減をしながらグイと引きました。すると中浮になっていた御客様は出て来ない訳には行きませんでした。中浮と申しますのは、水死者に三態あります、水面に浮ぶのが一ツ、水底に沈むのが一ツ、両者の間が即ち中浮です。引かれて死体は丁度客の坐の直ぐ前に出て来ました。

「詰らねえことをするなよ、お返し申せと言ったのに」と言いながら、傍に来たものですから、その竿を見まするといふと、如何にも具合の好きそうなものです。竿というものは、節と節とが具合よく順々に、いい割合を以て伸びて行ったのがつまり良い竿の一条件です。今手元からずつと現われた竿を見ますと、一目にもわかる実に良いものでしたから、その武士も、思わず竿を握りました。吉は客が竿へ手をかけたのを見ますと、自分の方では持切れませんので、

「放しますよ」といつて手を放して終った。竿尻より上の一尺ばかりのところを持つと、竿は水の上に全身を凜とあらわして、あたかも名刀の鞘を払ったように美しい姿を見せた。持たない中こそ何でもなかつたが、手にして見るとその竿に対して油然として愛念が起つた。とにかく竿を放そうとして二、三度こづいたが、水中の人が堅く握っていて離れない。もう一寸一寸に暗くなつて行く時、よくは分らないが、お客さんというのはでっぷり肥つた、眉の細くて長いきれいなのが僅に見える、耳朶が甚だ大きい、頭はよほど禿げている、まあ六十近い男。着ている物は浅葱の無紋の木綿縮と思われる、それに細い麻の襟のついた汗取りを下につけ、帯は何だかよく分らないけれども、ぐるりと身体が動いた時に白い足袋を穿いていたのが目に浸みて見えた。様子を見ると、例えば木刀にせよ一本差して、印籠の一つも腰にしている人の様子でした。

「どうしような」と思わず小声で言った時、夕風が一※筋さつと流れて、客は身体の何処かが寒いような気がした。捨ててしまつても勿体ない、取ろうかとすれば水中の主が生命がけで執念深く握っているのです。躊躇のさまを見て吉はまた声をかけました。

「それは旦那、お客さんが持つて行つたつて三途川で釣をする訳でもありませんまいし、お取りなすつたらどんなものでしょう。」

そこでまたこづいて見たけれども、どうしてなかなかしつかり掴んでいて放しません。死んでも放さないくらいなのですから、とてもしつかり握っていて取れない。といって刃物を取り出して取る訳にも行かない。小指でしつかり竿尻を掴んで、丁度それも布袋竹の節の処を握っているからなかなか取れません。仕方がないから渋川流という訳でもないが、わが拇指をかけて、ぎくりとやってしまった。指が離れる、途端に先主人は潮下に流れて行ってしまった、竿はこちらに残りました。かりそめながら戦ったわが掌を十分に洗って、ふところ紙三、四枚でそれを拭い、そのまま海へ捨てますと、白い紙玉は魂でもあるようにふわふわと夕闇の中を流れ去りまして、やがて見えなくなりました。吉は帰りをいそぎました。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、ナア、一体どうなのだろう。なんにしても岡釣の人には違いねえな。」

「ええ、そうです。どうも見たこともねえ人だ。岡釣でも本所、深川、真鍋河岸や万年のあたりでまごまごした人とも思われねえ、あれは上の方の向島か、もつと上の方の岡釣師ですな。」

「なるほど勘が好い、どうもお前うまいことを言う、そして。」

「なアに、あれは何でもございせんよ、中氣に決まっていますよ。岡釣をして、変な処にしゃがみ込んで釣っていて、でかい魚を引かけた途端に中氣が出る、転げ込んでしまえばそれまででしょうネ。だから中氣の出そうな人には平場でない処の岡釣はいけねえと昔から言いますあ。勿論どんなところだって中氣にいいことはありませんがネ、ハハハ。」

「そうかなア。」

それでその日は帰りました。

いつもの河岸に着いて、客は竿だけ持つて家に帰ろうとする。吉が

「旦那は明日は？」

「明日も出るはずになつてゐるんだが、休ませてもいいや。」

「イヤ馬鹿雨でさえなければあつしやあ迎えに参りますから。」

「そうかい」と言つて別れた。

あくる朝起きてみると雨がしよしよと降つている。

「ああこの雨を孕んでやがったんで二、三日漁がまずかつたんだな。それとも赤潮でもさしていたのかナ。」

約束はしたが、こんなに雨が降つちや奴も出て来ないだろうと、その人は家にいて、しようことなしの書見などしていると、昼近くなつた時分に吉はやって来た。庭口からまわらせる。

「どうも旦那、お出になるかならないかあやふやだったけれども、あつしやあ舟を持って来ておりました。この雨はもう直あがるに違えねえのですから参りました。御伴をしたいたともいい出せねえような、まずい後ですが。」

「アアそうか、よく来てくれた。いや、二、三日お前にムダ骨を折らしたが、おしまいに竿が手に入るなんてまあ変なことだなア。」

「竿が手に入るてえのは釣師には吉兆でさア。」

「ハハハ、だがまあ雨が降っている中あ出たくねえ、雨を止ませる間遊んでいねえ。」

「へい。時に旦那、あれは？」

「あれかい。見なさい、外鴨居の上に置いてある。」

吉は勝手の方へ行つて、雑巾盥に水を持って来る。すっかり竿をそれで洗つてから、見ると如何にも良い竿。じつと二人は検め気味に詳しく見ます。第一あんなに濡れていたの、重くなつていべきはずだが、それがちつとも水が浸みていないようにその時

も思つたが、今も同じく軽い。だからこれは全く水が浸みないように工夫がしてあるとしか思われない。それから節廻りの良いことは無類。そうして蛇口の処を見ると、素人細工に違いないが、まあ上手に出来ている。それから一番太い手元の処を見るとちよいと細工がある。細工といつたつて何でもないが、ちよつとした穴を明けて、その中に何か入れてもしたのかまた塞いである。尻手縄が付いていた跡でもない。何か解らない。そのほかには何の異つたこともない。

「随分稀らしい良い竿だな、そしてこんな具合の好い軽い野布袋は見たことがない。」  
「そうですね、野布袋という奴は元来重いんでございます、そいつを重くちやいやだから、それで工夫をして、竹がまだ野に生きている中に少し切目なんか入れましたり、痛めたりしまして、十分に育たないように片つ方をそういうように痛める、右なら右、左なら左の片方をそうしたのを片うきす、両方から攻める奴を諸うきすといひます。そうして拵えると竹が熟した時に養いが十分でないから軽い竹になるのです。」

「それはお前俺も知つているが、うきすの竹はそれだから萎びたようになって面白くない顔つきをしているじやないか。これはそうじやない。どういふことをして出来たのだろう、自然にこういう竹があつたのかなア。」

竿というものの良いのを欲しいと思うと、釣師は竹の生えている藪に行つて自分で以てさがしたり撰んだりして、買約束をして、自分の心のままに育てたりしますものです。そういう竹を誰でも探しに行く。少し釣が劫を経て来るとそういうことにもなります。唐の時に温庭※という詩人、これがどうも道楽者で高慢で、品行が悪くて仕様がな人でしたが、釣にかけては小児同様、自分で以て釣竿を得ようと思つて裴氏という人の林に這入り込んで良い竹を探した詩があります。一径互に紆直し、茅棘亦已に繁し、という句がありますから、曲がりくねつた細径の茅や棘を分けて、むぐり込むのです。歴尋す嬋娟の節、翦破す蒼莨根、とありますから、一々この竹、あの竹と調べまわつた訳です。唐の時は釣が非常に行われて、薛氏の池という今日まで名の残る位の釣堀さえあつた位ですから、竿屋だとして沢山ありましたらうに、当時持囃された詩人の身で、自分で藪くぐりなぞをしてまでも気に入つた竿を得たがつたのも、好の道なら身をやつす道理でございませう。半井卜養という狂歌師の狂歌に、浦島が釣の竿とて呉竹の節はろくろく伸びず縮まず、というのがありますが、呉竹の竿など余り感心出来ぬものですが、三十六節あつたとかで大に節のことを褒めています、そんなようなものです。それで趣味が高じて来るといふと、良いのを探すのに浮身をやつすのも自然の勢です。

二人はだんだんと竿に見入っている中に、あの老人が死んでも放さずにいた心持が次第に分つて来ました。

「どうもこんな竹は此処らに見かけねえですから、よその国の物か知れませぬ。それにしろ二間の余もあるものを持つて来るのも大変な話だし。浪人の楽な人だか何だか知らないけれども、勝手なことをやって遊んでいる中に中気が起つたのでしようが、何にしろ良い竿だ」と吉はいいました。

「時にお前、蛇口を見ていた時に、なんじやないか、先についていた糸をくるくるつと捲いて腹掛のどんぶりに入れちやつたじゃねえか。」

「エエ邪魔つけでしたから。それに、今朝それを見まして、それでわっちがこっちの人じゃねえだろうと思つたんです。」

「どうして。」

「どうしてつたつて、段々細につないでありました。段々細につなぐというのは、はじまりの処が太い、それから次第に細いのまたそれより細いのと段々細くして行く。この面倒な法は加州やなんぞのような国に行くと、鮎を釣るのに蚊鉤など使つて釣る、その時蚊鉤がうまく水の上に落ちなければまずいんで、糸が先に落ちて後から蚊鉤が落ちてはいけ

ない、それじゃ魚が寄らない、そこで段々細の糸を拵えるんです。どうして拵えますかという、鋏を持って行って良い白馬の尾の具合のいい、古馬にならないやつのを頂戴して来る。そうしてそれを豆腐の粕で以て上からぎゆうぎゆうと次第々々にこく。そうすると透き通るようにきれいになる。それを十六本、右撚りなら右撚りに、最初は出来ないけれども少し慣れると訳なく出来ますことで、片撚りに撚る。そうして一つ拵える。その次に今度は本数を減らして、前に右撚りなら今度は左撚りに片撚りに撚ります。順々に本数をへらして、右左をちがえて、一番終いには一本になるようにつなぎます。あつしあ加州の御客に聞いておぼえましたがネ、西の人は考がこまかい。それが定跡です。この竿は鮎をねらうのではない、テグスでやってあるけれども、うまくこきがついて順減らしに細くなつて行くようにしてあります。この人も相当に釣に苦労していますね、切れる処を決めて置きたいからそういうことをするので、岡釣じやなおのことです、何処でも構わないでぶつ込むのですから、ぶち込んだ処にかかりがあれば引かかってしまう。そこで竿をいたわつて、しかも早く埒の明くようにするには、竿の折れそうになる前に切れ処から糸のきれのようにして置くのです。一番先の細い処から切れる訳だからそれを竿の力で割出していけば、竿に取つては怖いことも何もない。どんな処へでもぶち込んで、引かかっていけな

くなつたら竿は折れずに糸が切れてしまう。あとはまた直ぐ鉤をくつつければそれでいいのです。この人が竿を大事にしたことは、上手に段々細にしたところを見てもハッキリ読めましたよ。どうも小指であんなに力を入れて放さないで、まあ竿と心中したようなものだが、それだけ大事にしていたのだから、無理もねえでさあ。」

などと言っている中に雨がきれかかりになりました。主人は座敷、吉は台所へ下つて昼の食事を済ませ、遅いけれども「お出なさい」「出よう」というので以て、二人は出ました。無論その竿を持つて、そして場処に行くまでに主人は新しく上手に自分でシカケを段々細に拵えました。

さあ出て釣り始めると、時々雨が来ましたが、前の時と違って釣れるわ、釣れるわ、むやみに調子の好い釣になりました。とうとうあまり釣れるために晩くなって終いまして、昨日と同じような暮方になりました。それで、もう釣もお終いにしようなあといふので、蛇口から糸を外して、そうしてそれを蔵つて、竿は苦裏に上げました。だんだんと帰つて来るといふと、また江戸の方に燈がチヨイチヨイ見えるようになりました。客は昨日からの事を思つて、この竿を指を折つて取つたから「指折※」と名づけようかなどと考えていました。吉はぐいぐい漕いで来ましたが、せつせと漕いだので、艀臍が乾いて来しました。

乾くと漕ぎづらいから、自分の前の処にある柄杓を取って潮を汲んで、身を妙にねじって、ばつさりと艀の臍の処に掛けました。こいつが江戸前の船頭は必ずそういうようにするので、田舎船頭のせぬことです。身をねじって高い処から其処を狙ってシャツと水を掛ける、丁度その時には臍が上を向いています。うまくやるもので、浮世絵好みの意気な姿です。

それで吉が今身体を妙にひねってシャツとかける、身のむきを元に返して、ヒョツと見るという、丁度昨日と同じ位の暗さになっている時、東の方に昨日と同じように葎のようなもの、ヒョイヒョイと見える。オヤ、と言って船頭がそっちの方をジツと見る、表の間に坐っていたお客も、船頭がオヤと言ってあっちの方を見ると、その方を見ると、薄暗くなっている水の中からヒョイヒョイと、昨日と同じように竹が出たり引込んだりします。ハテ、これはと、合点しかねているという、船頭も驚きながら、旦那は気が附いたかと思つて見ると、旦那も船頭を見る。お互に何だか訳の分らない気持がしているところへ、今日は少し生暖かい海の夕風が東から吹いて来ましたが、吉は忽ち強がつて、「なんでえ、この前の通りのものがあるんじやありませんか。」

怪を見て怪とせざる勇氣で、変なものが見えても「こつちに竿があるんだからね、何で

もない」という意味を言ったのであったが、船頭もちよつと身を屈めて、竿の方を覗く。客も頭の上の闇を覗く。と、もう暗くなつて苦裏の処だから竿があるかないか殆ど分らない。かえつて客は船頭のおかしな顔を見る、船頭は客のおかしな顔を見る。客も船頭もこの世でない世界を相手の眼の中から見出したいような眼つきに相互に見えた。

竿はもとよりそこにあつたが、客は竿を取出して、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言つて海へかえしてしまつた。

(昭和十三年九月)

## 青空文庫情報

底本：「幻談・観画談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年11月16日第1刷発行

底本の親本：「露伴全集」第六巻、岩波書店

1953（昭和28）年12月刊

※繰り返し返し記号の二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたようなもの）は、「々」で代えた。

入力：Sin

校正：伊藤時也

2000年5月31日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 幻談

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>